

〈論文〉

混血思想とホンジュラスの黒人 ——英語話者黒人の観点から——

金 澤 直 也

はじめに

本稿の目的は、ホンジュラスの国民国家統合理論「混血思想 (mestizaje)」が黒人におよぼす影響を検討することである。分析対象は、ホンジュラスに流入した黒人の歴史である。とくに、20世紀初頭、カリブ海沿岸にもうけられた米国ユナイテッド・フルーツ社のバナナ・プランテーションに働きにきて、国民国家統合上の問題になった英語話者黒人 (negro inglés) に焦点を当てる。よりおおきな文脈に位置づけると、歴史家アルゲタ (Argueta) が論じる「歴史なき人びとの歴史」が本稿の分析対象になる (Argueta 1992)。

アルゲタは『歴史なき人びとの歴史 1900～48年』で20世紀初めにきた英語話者の黒人移民は「ホンジュラスの人種や言語、習慣の壁を越え、ホンジュラス人になったのか？何名が残り、何名が故郷に帰り、何名がほかの国へ行ったのか？」と問うように、英領カリブ海出身の黒人のその後についてほとんど検討していない (Argueta 1992: 66)。

その背景に、1990年代まで、奴隷制廃止および植民地独立以降、とくに近現代における黒人の状況についてホンジュラスでほとんど研究されてこなかったことがあげられる¹⁾。ホンジュラス人類学歴史学研究所元代表の歴史家エウラケ (Euraque) は、ホンジュラスで黒人についての研究が少ない理由として、ホンジュラスではさまざまな人種が混血をとおして社会に統合さ

れており、人種問題がほかのラテンアメリカ諸国に比べ少ないと知識人や民衆が考えているためであると述べる。エウラケは主流社会を形成する混血の人びとに浸透している多様な人種の融合を謳うこの歴史認識を混血思想とよぶ。この混血思想が原因で黒人は等閑視されてきたという (Euraque 2004: 33-34)。

しかしながら、1990年代以降、国連や世界銀行、米州開発銀行などの国際機関が人種や民族にもとづく差別を経済発展の障壁とみなし、ラテンアメリカで黒人を対象にした調査や政策に取り組みはじめた (Andrews 2009: 194-195)。

このような潮流のもと、米国の人類学者や歴史家が中心になりホンジュラスのカリブ海沿岸に住む黒人の歴史を研究しはじめた。歴史家チェンバーズ (Chambers) は20世紀初めに国民国家統合上の問題になった英領カリブ海出身の黒人移民の歴史を分析し、次のように主張した。「ホンジュラスの場合、すべてをとりこむ国民国家統合理論〔混血思想〕と、ガリフナ (garifuna) の経験を強調し、黒人性を十把一絡げにする文献が原因で西インド諸島人 (West Indians) の経験は取りあげられてこなかった」 (Chambers 2010: 9 亀甲カッコ内筆者)。本稿では、1990年代以降盛んになるホンジュラス黒人史の研究成果にもとづき、等閑視されてきた多様な黒人の歴史を振りかえり、国民国家統合理論としての「混血思想」が黒人におよぼす影響を考察する。

I. さまざまな黒人の流入

「ガリフナがホンジュラスの文化論における黒人のアイデンティティを独占してきた。その理由は、彼らがホンジュラスのアフリカ系子孫の人口の大半をしめ、200年以上ホンジュラスに住んできたという事実にある」とチェンバーズはいう (Chambers 2010: 2)。

ガリフナとは、アフリカならびにアフリカ系辞典『アフリカーナ』によると、17世紀半ば、カリブ海のセントビンセント島に乗り上げて難破した奴隷船から逃げた黒人奴隷が、島にいた先住民カリブ族 (Caribe) と混雑して

形成されたエスニック集団を指す名称である。1797年、ガリフナはイギリス人によってセントビンセント島からホンジュラスに追放された。以来、ホンジュラスを中心に中米のカリブ海沿岸に多く住む (Appiah and Gates 1999: 811-813)。ガリフナの人口は約25万人といわれ、ホンジュラスの全人口約833万人の約3%をしめる (Editorial Santillana 2009: 218)。先住民と混血した黒人とされるガリフナは、カーンズ (Kerns) が「中米でそれほど持続的かつ包括的、そして熱心に注目をあびたグループはない」 (Kerns 1991: 209) と述べるように、1950年代以来欧米の研究者の分析対象となってきた。

このようなガリフナの文化を国立民俗局は国家の基盤をなす黒人文化とみなし、1976年以来ホンジュラス国立民俗舞踊団 (Ballet Folklórico Nacional de Honduras) をつうじてホンジュラス内外にひろめてきた (*Prensa*, 5 de abril de 1987)。1978年、文化観光省はガリフナの文化を「国民性の重要な民族的要素」としてユネスコに報告した (Alonso de Quesada 1978: 67)。1970年代からつづく政府主導の文化交流活動を背景にして、2001年、ガリフナの音楽・舞踊・言語がユネスコの第1回世界無形文化遺産に認定された²⁾。2011年、国連の「国際アフリカ系子孫年」に先住民アフリカ系子孫省 (Secretaría de Estado en los Despachos de Pueblos Indígenas y Afro hondureños) が設立され、初代大臣にガリフナのルイス・フランシスコ・グリーンが就任した。ガリフナとよばれるエスニック集団は政治と文化の両面でホンジュラスの黒人を代表してきたといえる。

ところで、2001年の国立統計局の調査から、ホンジュラスの黒人は2つにわけられていることがわかる。ひとつはガリフナであり、もうひとつは英語を母語とする英語話者黒人である。英語話者黒人の人口は12,370人と推計されている (INE 2001: 7)。一方、国立統計局が1988年にはじめて母語にもとづくエスニック集団の人口数を調査した際、ガリフナは調査対象となったが、英語話者黒人はとりあげられなかった。そのため、1988年2月24日、ホンジュラス人類学歴史学研究所の民族学部門代表フェルナンド・クルス＝サンドバルが人口統計調査を担当する役人ギジェルモ・ドゥボン・ブエ

ソに問い合わせた。「わたしたちは、スペイン語のほかにホンジュラスで何の言語が話されているかという質問について、ふたつの言語が一覧にないことに気がついた。 Choltey 語³⁾と英語である。英語は中米なまり、または専門家が中米英語 (Central American English) と呼ぶものである。1988年の人口は21,000人と考えられている。ほとんどの島の住人の母語である。北岸の都市や沿岸にすむ英語話者として知られている人びとの言葉である」(Cruz Sandoval 1988)。彼の指摘から、国立統計局は英語話者黒人を看過していたことがわかる。

カリブ海沿岸にすむ英語話者黒人が、首都テグシガルパのある内陸部で主流社会を形成する混血の人びとから等閑視されていたことは、1974年に英語話者黒人の歴史をしらべようとした米国の地理学者ダビッドソン (Davidson) のつぎの説明からもわかる。「ホンジュラス共和国の政治分野で非スペイン文化 (non-Spanish culture) の存在を説明するために役立つ文献がほとんどないことを知った」(Davidson 1979: vii)。30年後の2007年、英語話者黒人の歴史をしらべた社会学者アマジャ (Amaya) は「英語話者黒人はたくさん調査や論文があるカリフナと違い、おそらくホンジュラスの学術研究でいちばん軽視されてきた民族である。英語話者黒人の歴史的展開にはほとんどふれられない」と述べた (Amaya 2007: 13-14)。このことから、英語話者黒人は政府機関だけでなく、ホンジュラス内外の研究者からも客体化される機会がほとんどなかったといえよう。

他方、1990年代以降急増した調査から、ホンジュラスに流入した黒人はカリフナと英語話者黒人だけではないことがわかる。カリフナが1797年に上陸したとされるカリブ海沿岸部のトルヒージョ (Trujillo) には、カリフナの上陸以前からさまざまな出自の黒人がいたという (Arguedas 2011: 47)。ホンジュラスに流入した黒人はおおきく3つに分けることができる。第1は植民地時代にスペイン人やイギリス人、フランス人がつれてきた奴隷化された黒人である。第2は1797年に上陸したとされるカリフナである。第3は、20世紀初頭にカリブ海沿岸のバナナ・プランテーションに働きにきた英語

話者黒人である。

ホンジュラスへの黒人の流入に関するいちばん古い資料は、1526年、カリブ海沿岸部のトルヒージョの代表と住民がスペイン国王に500名の黒人の導入を求めた申請書にあるとされる (Bonilla 1955: 135)。他方、ホンジュラスの史料にはじめて登場した黒人の名前は、正確な年代は不明であるが、16世紀初頭のマルキジョ (Marquillo) といわれる (Lunardi 1946: 10)。1543年1月5日、サント・ドミンゴ島から最初の奴隷化されたアフリカ人がホンジュラスにきた。2年後の1545年、ウランチョ鉱山に1,500人の奴隷化された黒人がおり、5年後の1548年にはすでに黒人の反乱がおきたという (Becerra 1982: 57-58; Martínez Peláez 1979: 700)。16~18世紀、隣国グアテマラにくらべて先住民が少ないホンジュラスで、奴隷化された黒人はテグシガルパの銀山やスペイン人家庭の労働力として重宝された (Velásquez 2001)。

ガリフナがセントビンセント島からホンジュラスに上陸したとされる18世紀後半、カリブ海で帝国列強の争いが激しくなっていた。スペイン人はキューバやハイチから黒人をホンジュラスのカリブ海沿岸に導入していた。カリブ海沿岸におけるスペインの戦略拠点オモア砦の社会生活は奴隷化された黒人が支えていたという (Cáceres Gómez 2010)。ガリフナが1797年4月に上陸したとされるトルヒージョ周辺にはすでに自由黒人や奴隷化された黒人、兵士や大工などさまざまな職業や身分の黒人がいた (Payne Iglesias 2007: 185-188)。1801年の政府人口統計には、トルヒージョ近郊に300人のイギリス黒人 (Negros Ingleses) と200人のフランス黒人 (Negros Franceses) がいたことが記されている (Vallejo 1997: 131)。

1836年にマーティン (Martin) が執筆した『西インド諸島の歴史』からは、当時、ホンジュラスのカリブ海沿岸はイギリスが実効支配し、ジャマイカの属領とみなされていたことがわかる。地域一帯には、今日のベリーズにあたる英領ホンジュラスやジャマイカから、つぎの表のとおり、白人入植者をうわまわる奴隷化された黒人や自由黒人が導入され、マホガニーなどの伐採に従事していた (Martin 1836: 136)。

表1 1823～30年の属領ホンジュラス（現在のベリーズからニカラグアのカリブ海沿岸に相当）の人口（単位：人）

年	白人と自由有色人		奴隷		合計	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
1823	842	798	1,654	814	2,496	1,612
1826	1,896	891	1,606	804	3,502	1,695
1829	1,596	920	1,329	798	2,925	1,718
1830	937	919	1,347	680	2,284	1,599

出所 Martin (1836), p. 151.

沿岸部で働く黒人の出自についてマーティンは述べる。「ホンジュラスの黒人は現地では生まれたのではなく、本人または祖先がアフリカや西インド諸島から連れられてきた。〈中略〉そのため、彼らは出身地の習慣を維持し、多くの風習がそのままつづけられている」(Martin 1836: 151-152)。この記述から、ホンジュラスのカリブ海沿岸にはカリブ海の島々だけでなく、アフリカ大陸からも黒人が導入されていたことがわかる。

以上のとおり、植民地時代以来19世紀半ばまで、ガリフナだけでなく、多様な出自の黒人がホンジュラスに絶えずいた。ホンジュラスの黒人文化を代表するセントビンセント島から来たとされるガリフナの歴史は、流入したさまざまな黒人の歴史のひとつにすぎなかった。留意すべきは、英語で書かれた当時の文献に記されたカリブ海沿岸部の黒人たちの多様性や状況は内陸部で主流社会を形成する混血の人びとの知るところではなかったことである。

II. 英語話者黒人の到来

20世紀初頭、あらたな黒人たちがやってきた。カリブ海沿岸にもうけられた米国ユナイテッド・フルーツ社のバナナ・プランテーションに働きにきた英領カリブ海出身の黒人移民である。今日、英語話者黒人とよばれる人びとの祖先である。1899年、ユナイテッド・フルーツ社⁴⁾が設立されると、1860年代に開始されたバナナ生産は本格化し、1929年にホンジュラスは世界一のバナナ輸出国になった⁵⁾。労働力のとほしいカリブ海沿岸でバナナの

生産を支えていたのが英語話者黒人をはじめとするさまざまな国からの移民であった。

歴史家エウラケはいう。「ホンジュラス北岸は 1870 年代から 1930 年代に、1520 年代のスペイン人上陸以来いちばん人口がふえた。19 世紀、北岸の人口は全人口の 5 パーセントだった。しかし、1930 年代、全人口 90 万人の 20 パーセントをしめた。〈中略〉北岸のあたらしい人びとはこの地域でかつて見られなかったさまざまな人種や国籍の人びとからなっていた」(Euraque 1998: 155)。

沿岸部の人びとの多様性は、以下の 1930 年と 1940 年の政府の人口統計からわかる。つぎの人種別人口統計からはまず、首都がある内陸部のテグシガルパ県 (Departamento de Tegucigalpa) で主流社会を形成する混血の人びとが沿岸部のアトランティダ県 (Departamento de Atlántida) でも多数派を占めていることが確認できる。つぎに注目すべきは、両県の黒人の人口である。1930 年の全黒人人口 2 万 1092 人のうち、テグシガルパ県の黒人は 43 名、アトランティダ県は 5042 名である。1930 年、アトランティダ県の黒人は全黒人人口の約 24% をしめた。1940 年、アトランティダ県の黒人は 8340 名に増え、全黒人人口 2 万 4200 人の約 34% をしめた。沿岸部のアトランティダ県における黒人の増加は、黒人移民の流入を物語っているといえるだろう。

表 2 1930 年と 1940 年の人種別人口統計 (単位: 人)

	1930 年			1940 年		
	全国	テグシガルパ県	アトランティダ県	全国	テグシガルパ県	アトランティダ県
先住民	85,769	4,842	1,780	105,752	8,531	1,149
混血	736,182	106,896	24,106	957,135	145,653	30,639
白人	10,863	1,636	1,504	20,327	4,441	3,673
黄色人種	278	66	74	445	128	61
黒人	21,092	43	5,042	24,200	165	8,340
合計	854,184	113,483	32,506	1,107,859	158,918	43,862

出所 Dirección General de Estadística y Censos (1932, 1941) から筆者作成。

次に、国籍別人口統計から、沿岸部の人びとの多様性を分析する。とくに、人種別人口統計の人種項目「混血」や「白人」、「黒人」に一括されている人びとの内実を、国籍に照らしわあせて考察する。つぎの表は、1930年と1940年の国籍別人口統計調査の上位20カ国である。順位はカリブ海沿岸部に位置するアトランティダ県のデータを基準にしている。

1930年のアトランティダ県の国籍別人口統計調査で注目すべきは、3位のイギリスや4位のベリーズ、5位のジャマイカや6位の米国など英語圏出身の人びとの多さであろう。カリブ海沿岸で英語話者の黒人移民を調査したジョーンズたちの研究から、英語圏出身の人びとの多くは、人種別人口統計の黒人であることが考えられる（Jones and Glean 1971）。2位のエルサルバドルや7位のニカラグア、8位のグアテマラや9位のスペインなどスペイン語

表3 1930年と1940年の国籍別人口統計（単位：人）

順位	1930年			1940年				
	国籍	全国	テグシ ガルバ県	アトラン ティダ県	国籍	全国	テグシ ガルバ県	アトラン ティダ県
1	ホンジュラス	811,904	111,847	27,292	ホンジュラス	1,066,447	156,087	39,697
2	エルサルバドル	18,522	680	1,276	エルサルバドル	21,309	1,284	1,662
3	イギリス	2,921	28	969	イギリス	2,217	57	1,090
4	ベリーズ	684	—	451	米国	1,045	200	260
5	ジャマイカ	930	—	409	グアテマラ	8,823	169	229
6	米国	1,313	86	394	ニカラグア	3,298	302	222
7	ニカラグア	5,907	223	342	スペイン	541	84	134
8	グアテマラ	7,885	89	267	パレスチナ	835	163	97
9	スペイン	643	55	258	メキシコ	382	42	65
10	トルコ	569	43	185	イタリア	185	40	56
11	メキシコ	424	30	109	中国	299	118	53
12	中国	289	65	69	コスタリカ	203	35	43
13	イタリア	166	44	57	キューバ	126	4	37
14	キューバ	129	16	52	パナマ	75	10	22
15	フランス	112	11	44	フランス	79	21	20
16	コスタリカ	178	12	42	ドイツ	319	183	19
17	ドイツ	289	59	34	コロンビア	69	4	17
18	ブルガリア	53	—	34	ブルガリア	29	3	14
19	パナマ	77	1	31	ギリシア	35	—	14
20	ギリシア	69	8	17	スイス	41	15	14

出所 Dirección General de Estadística y Censos (1932, 1941) から筆者作成。

圏出身の人びともテグシガルバ県より、アトランティダ県のほうが多い。10位以下の国籍の人びとも、テグシガルバ県より、沿岸部のアトランティダ県におおく集中している。沿岸部の移民の人口動態を調査したエウラケの研究から、スペイン語圏出身の人びとの多くは人種別人口統計の混血とよばれる人に、10位以下にみられるヨーロッパ出身の移民の多くは人種別人口統計の白人に分類されていることがうかがえる (Euraque 1998)。さまざまな国籍の人が首都のあるテグシガルバ県より沿岸部のアトランティダ県に集中する構造は、1940年の国籍別人口統計調査でもほとんどかわらない。ふたつの統計から、1930～40年代のカリブ海沿岸には英領カリブ海出身の黒人だけでなく、さまざまな国籍や人種の人びとがたくさんいたことがわかる。以下では、20世紀はじめにきた多様な移民のなかで、英語話者の黒人移民が国民国家統合上の問題になっていたことが述べられる。

Ⅲ．黒人移民の排斥

1914年、国民党のフランシスコ・ベルトラン政権は黒人労働者の入国を毎月400人認めた (*Gaceta*, 8 de octubre de 1914)。しかし、米国のバナナ会社はジャマイカ、コロンビア、パナマ、キューバ、ベリーズから政府との取り決め以上の黒人移民を多数導入した。そのため、急激に増えた黒人移民が社会問題になった (Posas 1981: 6)。1916年7月18日の『ヌエボ・ティエンポ (*Nuevo Tiempo*)』紙に、つぎのとおり黒人の排斥を主張する連載記事「不必要な移民 (Inmigrantes innecesarios)」が掲載された。「よそ者の黒人の悪さは周知の事実である。〈中略〉ホンジュラス人の生活手段を奪いにきた危険でどうしようもない多くの黒人に国はながく耐えられないことを考えるべきである。〈中略〉危険なよそ者は我われといっしょに生きる権利がないことを理解していただきたい」 (*Nuevo Tiempo*, 18 de julio de 1916)。バナナ会社の拠点のひとつ、港町プエルト・カステージャでは、1924年に撮影された次の図に「黒人へ、墓場への無料チケットさしあげます。必要な人は、誰でもいいからラテンアメリカ人に問い合わせてください」と書かれている

図1 プエルト・カスティージャにおける黒人問題



出所 “Anti-negro Disturbances in Puerto Castilla.” From Willard L. Beaulac, American Vice Consul, to Secretary of State, July 21, 1924. United States National Archives, U.S. Department of State, Record Group 33, 815.5045/45.

とおり、公然と黒人が排斥されていた。

1927年3月31日の『クロニスタ (Cronista)』紙ではジャマイカ出身の黒人がホンジュラス人の仕事をうばっている状況が「出口の見えない黒人問題」として報じられ、黒人移民問題はますます深刻になっていた (Cronista, 31 de marzo de 1927)。そのため、自由党のビセンテ・メヒア＝コリンドレス大統領は1929年、移民法を改正し、黒人の入国に500ペソのデポジットを課した (Gaceta, 2 de abril de 1929)。しかしながら、当時、ホンジュラスは「バナナ共和国」とよばれ、米国のバナナ会社がホンジュラスの政治と経済を支配していたため、政府の施策は形骸化していた。それゆえ、混血の人びとが中心をなすホンジュラス主流社会に反米主義の風潮がひろまりつつあった。歴史家メヒア (Mejía) によると、米国の白人支配に抵抗して、混血の人びとによる国民国家建設をめざすメキシコのホセ・バスコンセロスの考え、すなわち「混血思想」をホンジュラスの知識人集団「革新グループ (Grupo Renovación)」がホンジュラスに紹介したのも、反米主義がたかまり、移民法が改正された1929年であった (バスコンセロス 1988; Mejía 1989: 336)。

一方、黒人移民を送りだす国ジャマイカの新聞『グリーナー (*Gleaner*)』の1931年10月24日の記事「カリブ海の黒人地帯」は次のように伝えていた。ホンジュラスの港町「プエルト・コルテスやテラ、トルヒージョのバナナ地帯でアフリカの血が強まり、ホンジュラスのものではなくなっている。大規模なプランテーションと黒人の導入がこのプロセスをうながしている」(*Gleaner*, october 24, 1931)。黒人移民問題は、国内だけでなく、国外でも取りざたされるようになっていた。1934年、ついに国民党のティブルシオ・カリアス＝アンディーノ政権は移民法を改正し、黒人の入国を禁止した(*Gaceta*, 20 de marzo de 1934)。

黒人移民問題は、米国のバナナ会社とホンジュラス主流社会の混血の呼びとが黒人移民を労働問題のスケープゴートにする過程で生じていたという。歴史家チェンバーズによれば、政府はバナナ会社と政府、混血のホンジュラス人労働者のあいだにある問題の原因を黒人移民に帰していたとされる。黒人移民のおおくは読み書きができ、高い教育水準をもち、英語を理解するためバナナ会社の管理職に就いた。他方、内陸部から出稼ぎにきた混血のホンジュラス人は教育水準が低く、読み書きがほとんどできず、英語もわからないため、低賃金の仕事しかなかった。留意すべきは、ホンジュラス人労働者にとって、管理職にいる英語話者黒人より、おなじレベルの仕事をうばいあうエルサルバドルやニカラグア出身の移民のほうが脅威であった点である。しかし、ホンジュラスの知識人や支配層は、教育水準のちがいにともづく問題を、人種と言語のちがいにともづく問題にすりかえ、英語を話し、米国人のもとで働く黒人移民を反米主義に重ねあわせ排斥したという(Chambers 2010)。

バナナの積出港としてさかえた港町ラ・セイバの郷土史『ラ・セイバのルーツと歴史 1810～1940年』によると、英語話者の黒人移民の流入とともにラ・セイバで人種差別がはげしくなったという。英語話者黒人の居住区バリオ・イングレス(*Barrio Inglés*)では、1924年までスペイン語は話されず、白人の船員以外あることができなかった(Canelas Díaz 1999: 75)。国立民俗舞踊団代表をつとめるガリフナの歴史家クリサント・メレンデスはインタ

ビューで、ラ・セイバに黒人の散髪を禁止する床屋があっただけでなく、1915年にラ・セイバの中央公園正面につくられた高級ホテル「パリ」に黒人は宿泊できなかつたことをあきらかにしている (*Tribuna*, 29 de enero de 2000)。

ここで強調したいことがある。それは、20世紀初頭の国民国家形成期における黒人問題の主体は英語話者黒人であり、ガリフナではなかつた点である。当時、ガリフナが黒人移民問題にどのように関わっていたのかについての記述はなく、ガリフナを問題視する史料もない。1990年代以降、ガリフナがホンジュラスの黒人を代表する存在としてメディアに盛んにでる一方、英語話者黒人への言及がほとんどないと対照的である。英語話者黒人の歴史を調べたエチェベリ＝ヘントは「西インド諸島出身のパナナ労働者を取りまく沈黙は彼らのおとなしさに原因があるのではない。原因はむしろ選択的な歴史にある」と主張し、彼らを「忘れられた労働者」と呼んだ (Echeverri Gent 1992: 308)。

IV. 混血による黒人の包摂と排除

1990年代まで混血の人から成るホンジュラス主流社会で黒人の存在は等閑視されていた。このことは、1984年に港町ラ・セイバで混血に分類される大学生78名を対象におこなわれた調査「混血の人びとがアフリカ系人にもつ偏見」からも明らかである (Ghidinelli 1984)。アンケートの結果、「78名中だれもガリフナと英語話者黒人を区別できず、誰もガリフナと英語話者黒人の歴史的ルーツを知らないことがわかつた」。大学生でさえ、ガリフナや英語話者黒人といわれる人の違いがわからず同一視し、彼らの歴史さえ知らないことを考慮すると、主流社会を形成する混血の人びとのほとんどは黒人の歴史や社会背景に無関心であるといっても過言ではないだろう。1996年、当時の文化芸術スポーツ省大臣パストル＝ファスケジェ (Pastor Fasquelle) も、英語話者黒人が住むベイアイランド諸島代表者会議でつぎのとおり述べていた。「わたしたちはあなた方がどこから来たのかを知らない。わたしたちはあなた方が誰なのかを知らない。あなたたちには歴史がない」

(Graham 2000: 287)。

黒人の過去に対する主流社会の混血の人びとの無関心と忘却は、多様な出自の黒人を単純化してあらわしてきたことに示されている。英領カリブ海のさまざまな島からきた黒人移民やその子孫を「英語話者黒人」と一括するだけでなく、英語話者黒人とガリフナもひとまとめにして「黒人」と呼んできた。他方、ガリフナや英語話者黒人以外の黒人、すなわち、植民地時代に流入した奴隷化された黒人の子孫やスペイン語しか話さない黒人、混血化した黒人という概念はなく、学術的にも制度的にもカテゴリーとして存在しない⁶⁾。

このような考えの背景には、冒頭でふれた主流社会を構成する混血の人びとが共有する歴史認識「混血思想」が一因としてある。なぜなら、混血思想は黒人が混血をとおして統合され、いなくなったという考えと、混血により人種差別がなくなったという理解を促してきたからである。

第1に、黒人は混血していなくなったという理解の例として、つぎがあげられる。先述した黒人移民排斥を訴える大統領カリアス＝アンディーノ政権末期の1945年、人口統計局は最後となる人種別人口統計を発表した(Dirección General de Estadística y Censos 1947)。1945年以降、人種別人口統計はおこなわれなくなり、先住民と黒人の人口は政府の人口統計で調査されなくなった⁷⁾。このことを、歴史家バラオナは「1945年以降、ホンジュラス国家は人口統計調査から先住民と黒人を排除することで排他的な混血アイデンティティを形成した」と説明する(Barahona 2004: 226)。つまり国民を主観的かつ客観的にあらわす政治の道具である人口統計の対象から黒人をはずすことは、黒人を国民としてみなさなくなったことを示唆しているという。黒人は国民国家統合の埒外にあった。そのため、英語話者の黒人移民の子孫とともに黒人に一括されるガリフナの人びとも看過されていた。

1947年に刊行された小学校3年生を対象にした公教育省のテキスト『わが国民』は述べる。「ホンジュラス人は白人と混血、ふたつの人種からなり、先住民はいない」(Bardales Bueso 1947: 11)。テキストにしたがえば、当時、ホンジュラス人は白人や混血の人びとからなり、黒人や先住民は国民の概念

に含まれていなかったといえよう。この理解は30年後の1976年、文化観光情報省（Secretaría de Cultura, Turismo e Información、略 SECTIN）が刊行した記事「少数民族」のつぎの記述にもあらわれている。ホンジュラスに「マイノリティーの文化は現在ほとんど存在しない。高度の混血化により、人種の統合は政府がもとめるものではなく、社会的事実になっている」（SECTIN 1976: 31）。ホンジュラスの文化を国の内外に宣伝する政府機関が混血によって少数民族の文化がなくなったと説明していたのである。このように混血によって少数民族が統合され、いなくなることを謳う混血思想を歴史家レイバ＝ピバスは「同化政策としての民族抹殺（Etnosidio）」と呼んだ（Leiva Vivas 1993: 140）。

人種や文化を研究するホンジュラスの学者も混血思想を内面化していた。人類学者チャベス＝ボルハス（Chávez Borjas）はいう。「黒人の要素は、植民地時代のはやいころから、国民の歴史的ルーツの重要な一部として、スペイン人と先住民の要素とともに混血のプロセスにとりこまれている。〈中略〉植民地時代の黒人は混血するなかで消えた。今日、黒人の文化は残っていない。ただ、現在のホンジュラス人の身体的特徴に見られるだけである」（Chávez Borjas 1990: 14）。かれの説明から、実在するカリブ海沿岸の黒人や彼らの文化は学者にも等閑視されていたことがわかる。

政治家も黒人を蔑んでいた。1971～72年に大統領をつとめた国民党のラモン・E・クルスは「人種概念を科学的根拠に欠ける」と否定しながらも、世界のさまざまな人種のなかで「黒人だけが文化をうみださなかった」と差別的な意見を述べていた（Cruz 1953: 10）。以上から、黒人は文化と政治の両面において官僚や学者、政治家から不可視の状況におかれていたことがわかる。

他方、黒人も混血思想にもとづいて黒人は植民地時代に混血によりいなくなったと考えている場合がある。2006～09年に文化芸術スポーツ省副大臣をつとめたガリフナのサルバドル・スアソはいう。「植民地時代の黒人はホンジュラス社会に完全に同化した。それは人びとにみられる黒人の特徴がものがたっている。そのため、黒人の血がホンジュラス人にながれていること

は無視も否定もできない」(Suazo n.d.: 9)。ここで強調すべきは、スアソが植民地時代に黒人は混血をとおして同化したため、ホンジュラス人は黒人の血をもつと主張している点である。すなわち、スアソは黒人を包摂し排除する混血思想の包摂の役割を重視しているといえよう。この理解は2002年11月20日の新聞で「16世紀にはじまる混血により、80%のホンジュラス人がアフリカ系人の血をもつ」と報じられたように、2000年以降のメディアでもみられるものである(*Prensa*, 20 de noviembre de 2002)。

つぎに、混血により人種差別はなくなったという混血思想にもとづく人びとの語りをとりあげる。

1958年、ホンジュラス弁護士協会会員アルバラド＝ガルシアは南北アメリカ先住民研究所(Instituto Indígenista Interamericano)から刊行した『ホンジュラス先住民法』に「ホンジュラスには人種差別がない」と報告していた(Alvarado García 1958: 15-16)。

しかし、同年の1958年3月6日の『クロニスタ』紙記事「黒人」で次のとおり黒人への差別が取りあげられていた。「トルヒージョで黒人は嫌われ、黒人はコンプレックスをもっている」。「政府は疎外されている民族である黒人を救わなければならない」(*Cronista*, 6 de marzo de 1958)。この記事に対して、ガリフナ最初の医師といわれるアルフォンソ・ラカジョは「わたしたちは悲しい笑みをうかべる」と答え、黒人は歴史的、地理的、経済的、文化的に疎外されてきたことを同紙であきらかにしていた(*Cronista*, 23 de abril de 1958)。

人種差別の存在は、被害をうけてきた黒人だけでなく、主要な新聞メディアでも指摘されていた。1988年8月13日の『ティエンポ(*Tiempo*)』紙記事「ホンジュラスの人種差別」はいう。「わが国に人種差別はある。ガリフナといわれる黒人だけでなく、アラブ人や中国人、ユダヤ人、先住民も差別されている。〈中略〉ホンジュラスに人種差別がないと言う人がまだいる。〈中略〉わが国から人種差別をなくすことは難しいだろう」(*Tiempo*, 13 de agosto de 1988)。この記述から混血によって差別がなくなるどころか、差別が隠されてきたことがわかる。

混血思想によって人種差別が看過されてきたことは、歴史家エウラケが『混血思想との歴史的対話、ホンジュラスのナショナル・アイデンティティ』であきらかにした現代のホンジュラスを代表する二人の知識人の人種差別に対する姿勢にみてとれる (Euraque 2004)。

ひとりは、1994～98年に文化芸術スポーツ省大臣をつとめた先述のパストル＝ファスケジェである。米国のトリニティー・カレッジで歴史をおしえていたエウラケが2001年にホンジュラスで人種問題について講演した際、パストル＝ファスケジェは次のように述べた。「ようこそ、エウラケ、あなたはわたしたちの世界観に無縁の基準である人種をわすれるべきである」(Euraque 2004: 10; *Tiempo*, 31 de enero de 2001)。しかし、7年後の2008年、パストル＝ファスケジェは前言を撤回するかのごとくいった。「混血はけっして同質的ではなかった。差別が無邪気な偏見とともにあった。〈中略〉先住民と黒人はホンジュラスの人種差別の犠牲者であり、出自と文化が原因で疎外されていた」(Pastor Fasquelle 2008: 146)。パストル＝ファスケジェは一転して人種差別の存在を認めたが、エウラケが対談したもうひとりの人物はほぼ同時期に人種差別に対して対照的な態度を示している。

ホンジュラスの主要紙『トリブナ (*Tribuna*)』の解説者であり、ホンジュラス国立自治大学出版編集委員会代表ファン・ラモン・マルティネスである。エウラケが1997年ごろインタビューした際、彼はホンジュラスの人種差別をしらべるエウラケの研究が米国の文化や大学の研究動向にあまりにもつよく影響を受けていると述べ、難色を示したという (Euraque 2004: 123–124)。その一方、マルティネスは同年の1997年4月8日の『トリブナ』紙で「昔の知識人はホンジュラスが人種的に同質であるとわたしたちに説き、現実を隠していたことを私は認めなければならない」と述べていた (*Tribuna*, 8 de abril de 1997)。

人種差別の存在をみとめていなかったふたりの翻意から、ふたりはスタッツマン (Stutzman 1981) が「すべてを包摂する排除のイデオロギー」と呼び、実在する人種差別を不可視にする混血思想の排除の側面を認めたことが

わかる。他方、歴史家バラオナは、ホンジュラスにおける混血思想の問題は先住民や黒人を不可視にし、排除してきたことではなく、支配層が混血思想を隠れみのにして国を統治してきた点にあると述べる (Barahona 2004: 223)。すなわち独立以来の支配層である白人は混血思想をとおして自分たちの存在を様々な人種のなかにカモフラージュさせ、見えないかたちで権力を維持しているという。

V. よそ者扱い

1997年4月9日の『トリブナ』紙に、先住民と混血した黒人とされるガリフナはヨーロッパ人と先住民に次ぐ「国民性の第3のルーツ」であると報じられた。「私たちの身体に彼らの特徴があるのは明らかだ」と説明がつけくわえられていた (*Tribuna*, 9 de abril de 1997)。この記事には、人種混淆によってガリフナが社会に組みこまれたとみなす「私たち」を名のる主流社会の人びとの混血思想がみてとれる。

混血思想をつうじてガリフナが社会に統合されたという見解は、ガリフナの主張のなかにもうかがえる。1976年以来国立民俗舞踊団代表をつとめ、ガリフナ文化を啓蒙してきたガリフナの歴史家メレンデスは述べる。「文化に肌の色はない。白人の文化や黒人の文化というものはない。私たちの肌の色は違うが、踊りと音楽は世界共通である。ガリフナ語を話す混血のひともいれば、スペイン語を話すガリフナもいる。それは、私たちがお互いの言語や文化を理解し合う以上にすばらしい統合である」 (*Prensa*, 7 de marzo de 2011)。先述したガリフナの文化芸術スポーツ省副大臣スアソ同様、メレンデスも混血を社会を統合する考えとみなしていることがわかる。

一方、英語話者黒人は排除されてきた。港町ラ・セイバでホテルを経営する40歳の英語話者黒人の男性マイケル(仮名)はいった。「おれたちはよそ者 (foráneo) だ。インディオ (indio)⁸⁾はおれたちを外国人 (extranjero) のようにみる。ホンジュラスに黒人の大統領はいない」(筆者インタビュー、2010年3月19日、ラ・セイバ)。ここで注目すべきは英語話者黒人のマイ

ケルが使った言葉「よそ者」である。ホンジュラスでこの言葉は「人種差別をおこない、人を憎み、同胞（nationals）と呼ぶに値しない人を意味する」という（Craft 1998: 138）。

英語話者黒人がよそ者とみなされる理由として、第1に混血思想の影響があげられる。1972年4月12日の『クロニスタ』紙記事「ホンジュラスに人種対立はない」で「人種対立をあおる者が国のうらぎり者である」といわれるように、混血思想のもとでは、人種差別を糾弾する者が混血によって人種差別がなくなった社会に人種差別の問題をもちこみ、社会に分断をもたらす人種差別主義者であると考えられている（*Cronista*, 12 de abril, 1972）。それゆえ、首都テグシガルパに住む49歳の混血の弁護士ホセ・ロペス（仮名）が「黒人は人種差別主義者である」と述べるように、混血の人びとは人種差別の問題を取りざたす黒人を人種差別をするよそ者とみなしているのである（筆者インタビュー、2011年3月15日、テグシガルパ）。

英語話者黒人がよそ者扱いされる第2の理由として、彼ら自身が主流社会に社会参加してこなかったことがあげられる。1987年7月23日、ホンジュラスの政府機関と研究機関、少数民族の組織代表が少数民族の発展を目的とする「ホンジュラス土着民セミナー」を開催した⁹⁾。しかしながら、カリブ海沿岸部の英語話者黒人をまとめる組織が存在しなかったため、英語話者黒人はセミナーに呼ぶことができなかったという（SECPLAN 1987: 26）。英語話者黒人が社会参加をめぐる集団行動に関心が薄い傾向は、2011年におこなわれた少数民族の統計にもあらわれている。つぎの表から、英語話者黒人は9つの少数民族のなかで共同体の活動へ「頻繁に」参加する割合が33.3%と先住民マヤ・ Choltey とともにいちばん低いことがわかる。一方、ガリフナは55.6%とやや参加する傾向にある（Faúndez y Valdés 2011: 44）。

英語話者黒人の多くが主流社会に関わらない理由は、彼らの過去と現在にもとめられる。

過去の要因として、混血思想が形成された20世紀初頭に英語話者黒人が国民国家統合上の問題になった先述の点だけでなく、彼らの住むカリブ海沿

表4 共同体の活動への参加度 (単位: %)

	なし	たまに	頻繁に
ナワ	0.0	0.0	100.0
タワウカ	0.0	0.0	100.0
トルパン	0.0	16.7	83.3
ミスキート	0.0	30.0	70.0
レンカ	0.0	33.3	66.7
ガリフナ	11.1	33.3	55.6
ベッシュ	0.0	50.0	50.0
マヤ・ Choltey	0.0	66.7	33.3
英語話者黒人	0.0	66.7	33.3

出所 Faúndez y Valdés (2011), p. 44.

岸の島々が1860年までイギリスに属すると考えられていたことがあげられる。そのため、20世紀半ばになってもイギリス国籍を主張する英語話者の島の住人がおり、島の住民と本土の人間のあいだにたえず確執があったという (Adams 1957: 640)。

ホンジュラスは植民地時代以来、カリブ海沿岸の領土と島々の支配をイギリスと争ってきた。とくに1821年の中米独立後、イギリスはホンジュラスの内紛に乗じて、現在のベリーズにあたる英領ホンジュラスを拠点にし、ホンジュラスのカリブ海沿岸の島々に進出していた。しかし、1857年、大西洋と太平洋をつなぐ鉄道建設のためにホンジュラスに注目した米国の介入により、当該地域の支配権はホンジュラスに返還された (Gómez 1909)。

20世紀初頭、島々にスペイン語を公教育と公文書の唯一の言語にする政策が導入された。そのため、1970年代後半まで島の公立学校で生徒が英語を話すすと罰せられたという (Brooks 2003)。1982年には憲法第6条で「ホンジュラスの公用語はスペイン語である。国家は正しいスペイン語を守り、スペイン語教育をうながす」と規定され、スペイン語教育の普及がすすめられた。

ところが、1988年、レオン＝ゴメス (León Gómez) は「イギリスから島が返還されて100年たつのにまだ島をホンジュラス化できていない」と述べていた。さらに、「英領とアンティル諸島に起源のある人びとは完全に国民文化の

そとにおかれている。〈中略〉北米のバナナ会社が60年前に英領の島からホンジュラス北岸へ不法に導入した英語話者黒人は同化がもっとも難しい。英語やプロテスタントなど多くのイギリス文化を保ち、第3世代でさえ国に同化していない」と説明していた (León Gómez 1988: 10)。英語話者黒人はホンジュラスのカリブ海沿岸や島々に植民地時代以来浸透したプロテスタント教会が運営する英語学校のもと、英語を使用する独自の生活様式を維持していたのである。むしろ、島の住民の観点からすると、国の教育制度は機能しておらず、ホンジュラスでは十分な教育が受けられないという (Tomczyk 2007)。

実際に、米州開発銀行が資金提供した調査によると、2007年のホンジュラス全体の非識字率は16%、ガリフナは10.3%であるが、英語話者黒人は2.4%と低い。すなわち、英語話者黒人は国の教育制度にしたがっている主流社会の人びとやガリフナより教育水準が高い。さらに、2011年のホンジュラスの最低賃金の平均は月収335米ドル、ガリフナの平均月収は234米ドルであるが、英語話者黒人は408米ドルと、英語話者黒人は国およびガリフナの平均月収をうまわわる。この背景には英語話者黒人の主な収入源であるカリブ海における国際クルーズの影響があるという (Faúndez y Valdés 2011: 15, 23-24)。そのため、2012年のユニセフの報告書によれば、ホンジュラス全体の極貧の割合は41.6%、ガリフナは73.5%であるが、英語話者黒人の極貧の割合は39%と、国全体およびガリフナより貧困の度合いが低い (UNICEF 2012: 41)。

1990年代以降、英語話者黒人が多く住むロアタン島をはじめとするカリブ海の島々は国際クルーズ拠点となってきた。2015年には18社の船324便が寄港し、2015年にホンジュラスに来た観光客209万2700人のうち、約44%にあたる91万7938人がクルーズで来た。観光は家族からの海外送金、関税特区 (Maquilas)、コーヒーに次ぐ第4位の外貨獲得源となっているが、英語話者黒人は観光産業の活発な地域に暮らしているのである (IHT s.f.: 9, 18)。

カリブ海の国際クルーズに英語をつうじて関わることのできる英語話者黒人は内陸部で主流社会を形成する混血の人びとやスペイン語を使用するガリ

フナより経済機会にめぐまれている。英語話者黒人が疎外され、よそ者扱いされる背景には、混血思想にもとづく黒人への人種差別だけでなく、主流社会へ依存する必要のない外部経済へのアクセスが彼らにあったのである。

おわりに

以上から、黒人を包摂し排除する混血思想がホンジュラスの主流社会を形成する混血の人びとの背景にあることがうかがえる。すなわち、混血思想は混血による多様な人種の融合という理念のもと、欧米の研究者が1950年代以来注目してきた先住民と混血した黒人といわれるガリフナを国民性の要素に組みこむと同時に、イギリスと米国の進出を呼び起こす英語話者黒人を排斥する役割を担ってきた。そしてまた、混血思想のもと、人種差別を指摘する黒人は人種差別を扇動する者とみなされ、人種差別をするよそ者として主流社会から排除されてきた。混血思想の人びとへの浸透は、本稿で取り上げた政府機関の文書や、官僚や知識人の言説、新聞メディアで繰り返される人種差別の欠如からみてとれる。

最後に留意すべきは、ガリフナと英語話者黒人は黒人と一括されてきたが、混血の黒人とされるガリフナは1990年代の新聞メディアで「国民性の第3のルーツ」といわれ、国民性の要素をなす黒人とみなされる一方、英語話者黒人は看過されている点である (*Tribuna*, 9 de abril de 1997)。

英語話者黒人は20世紀初頭、国民国家統合上の問題となり新聞メディアで盛んに取りあげられたが、1990年代以降のメディアで触れられることはほとんどない。他方、ガリフナは20世紀初頭、メディアで問題視されることも取りあげられることもほとんどなかったが、1990年代に盛んに報道されるようになった。外貨獲得源として重要なカリブ海の観光資源としてメディアが取りあげる黒人はガリフナであり、国際クルーズ拠点となっている島々に住み、観光業に従事する英語話者黒人ではない。

なぜ、英語話者黒人とガリフナの主流社会におけるプレゼンスが逆転したのだろうか。その理由は誰も検討していない。

確かなことは、ガリフナは欧米の研究者が関心をよせる歴史や文化をもつ既存資源として各政権に珍重されるだけでなく、ガリフナ自身が権利請願をつうじて主流社会への参加を進めてきた点である¹⁰⁾。先述したとおり、ガリフナの生活水準は英語話者黒人だけでなく全国平均より低い。ガリフナの多くは主流社会の人びととおなじスペイン語で生活を営み、英語を使用しない。そのため、英語話者黒人とことなりカリブ海の観光産業へのアクセスが乏しく、主流社会に参加することで生計を立てるしかなかったのである。

一方、英語話者黒人は英語をとおして外部経済とつよくむすびついているため、自分たちより生活および教育水準の低い主流社会に関わる必要に迫られてこなかった。それゆえ、英語話者黒人は植民地時代からつづくイギリスとの領土問題や、20世紀初頭の米国のバナナ会社の支配を主流社会に想起させる「よそ者」として、現在も「歴史なき人びと」のままでありつづけている。

後日、筆者が先述の英語話者黒人マイケルと彼が生まれ育った港町ラ・セイバで経営するホテルの前からタクシーに乗ったときのことである。筆者がマイケルとスペイン語で話していると、混血とみられる運転手が私に尋ねた。「出身はどこ?」。筆者は「日本だ」とこたえた。運転手はスペイン語を話す黒人のマイケルに「出身はどこ?」と尋ねた。かれは「おれはここだ!」と語気を強めてこたえた。ここには、黒人を「よそ者」とみなすホンジュラスの主流社会を構成する混血の人びとの認識があらわれているといえよう。

ガリフナが包摂された背景に1950年代以来つづく欧米の研究者の注目があつたように、英語話者黒人が主流社会に組みこまれるか否かは、1990年代以降関心を寄せはじめた我われ外部の人間のまなざしにかかっているのかもしれない。

* 本稿は科学研究費助成事業 基盤研究 (B)「グローバル化時代における南北アメリカの国家・市民社会・社会運動」(課題番号: 22401009、研究代表者: 鈴木茂)による研究成果の一部である。査読者のお二方には非常に有益なご指摘をいただきました。心より感謝申し上げます。

註

- 1) 奴隷制廃止以降、黒人の研究が少ないのはホンジュラスだけではない。中南米地域全体におよぶ (Fiehrer 1979)。1970 年、ラテンアメリカの国民国家形成期の人種関係をしらべた歴史家モーナーは「スペイン領アメリカの歴史家は奴隷制が廃止されるとすぐに黒人への関心をほとんど失うようだ。いずれにせよ、黒人は歴史文献から完全に消えている」と述べていた (Mörner 1970: 214-215)。
- 2) UNESCO. “Language, Dance and Music of the Garifuna.” <http://www.unesco.org/culture/ich/RL/00001> [2014 年 8 月 19 日閲覧]。
- 3) チョルティ語はホンジュラス西部のコパン県にすむ先住民チョルティ族の言語である。クルス＝サンドバルは 1984 年にチョルティ族の人口を 2000 人と推計していた (Cruz Sandoval 1984: 427)。
- 4) ユナイテッド・フルーツ社は、1871 年にボストンでジャマイカ産バナナの取引をはじめた米国人船長ロレンソ・ペーカーが設立したボストン・フルーツ社と、中米コスタリカのカリブ海沿岸で鉄道を建設していたマイナー・キースがはじめたバナナ会社が合併してできた (Langley and Schoonover 1995: 34-35)。
- 5) バナナの輸出量は 1912 年の 840 万茎 (stems) から、1929 年に 3 倍の 2900 万茎になり、世界最大となった (Soluri 2003: 67)。
- 6) 数少ない例外として、1951 年にラング (Lang 1951: 215) が論考「ホンジュラスの人種」で「アンティル諸島出身の黒人 (Negro antillano)」や「大西洋岸の有色人 (Moreno)」、「アフリカ系混血 (Afromestizo)」とよぶ混血化した黒人が各地に住んでいることを指摘し、黒人の多様性に言及していた。
- 7) 人種別人口統計が廃止された理由はわからない。しかし、人口統計は科学的根拠をもたないことが役人に指摘されていた。たとえば、ホンジュラス中央銀行経済研究部門は「利用できる人種の情報は非常にかわりやすく、肌の色という客観的に疑わしい基準にもとづいているため、遺伝的、生物学的に明確な意味を持たない」と述べていた (Tosco y Mondragón 1958: 10)。
- 8) ホンジュラスの口語でインディオ (indio) は混血の人メスティーソ (mestizo) やラディーノ (ladino) をさす。この場合、先住民を意味するのではない。
- 9) 先住民と黒人の民族組織が連帯する契機となった「ホンジュラス土着民セミナー」については金澤 (2009) を参照。
- 10) 1990 年代に活発になるガリフナの権利請願については金澤 (2010) を参照。

参考文献

- 金澤直也. 2009. 「黒人から先住民へーホンジュラスのガリフナを事例にして」(『イベロアメリカ研究』31巻1号), 51-61 ページ.
- . 2010. 「世界銀行の貧困削減戦略とネオリベラル多文化主義ーホンジュラスの少数民族ガリフナを事例にして」(『年報地域文化研究』14号), 155-171 ページ.
- バスコンセロス, ホセ. 1988. 「宇宙的人種」高橋均訳(『現代思想』16巻10号, 8月), 106-121 ページ.
- Adams, Richard. 1957. *Cultural Surveys of Panama-Nicaragua-Guatemala-El Salvador-Honduras* (Washington: Pan American Sanitary Bureau, Regional Office of the World Health Organization).
- Alonso de Quesada, Alba. 1978. *Towards a Cultural Policy for Honduras* (Paris: Unesco).
- Alvarado García, Ernesto. 1958. *Legislación indigenista de Honduras* (México: Instituto Indígenista Interamericano).
- Amaya, Jorge Alberto. 2007. “Los negros ingleses o creoles de Honduras: etnohistoria, racismo y discursos nacionalistas excluyentes en Honduras,” *Yaxkin*, (23), pp. 13-33.
- Andrews, George Reid. 2009. “Afro-Latin America: Five Questions,” *Latin American and Caribbean Ethnic Studies*, 4(2), pp. 191-210.
- Appiah, Anthony and Henry Louis Gates (eds.). 1999. *Africana: The Encyclopedia of the African and African American Experience* (New York: Basic Civitas Books).
- Arguedas, Aaron. 2011. “El capitán de morenos Tadeo Munieza y la expulsión de los ingleses de Trujillo el 27 de abril de 1797,” *Revista Historia*, (63-64), pp. 35-49.
- Argueta, Mario. 1992. *Historia de los sin historia, 1900-1948* (Tegucigalpa: Editorial Guaymuras).
- Barahona, Marvin. 2004. “Del mestizaje a la diversidad étnica y cultural: la contribución del movimiento indígena y negro de Honduras,” en Darío Euraque, Jeffery Gould y Charles Hale (comps.), *Memorias del mestizaje: cultura política en centroamérica, 1920-1990s*. (Guatemala: CIRMA), pp. 215-251.
- Bardales Bueso, Rafael. 1947. *Nuestro pueblo* (Tegucigalpa: Talleres Tipografías Nacionales).
- Becerra, Longino. 1982. *Evolución histórica de Honduras* (Tegucigalpa: BANKTUN).
- Bonilla, Conrado. 1955. *Piraterías en Honduras* (San Pedro Sula: Imprenta Renovación).
- Brooks, Arty. 2003. “Bi-Lingual Education,” *Bay Islands Voice*, June 5th, 2003.
- Cáceres Gómez, Rina. 2010. “Slavery and Social Differentiation: Slave Wages in Omoa,”

- in Lowell Gudmundson and Justin Wolfe (eds.), *Blacks and Blackness in Central America: Between Race and Place* (Durham: Duke University Press), pp. 130–149.
- Canelas Díaz, Antonio. 1999. *La Ceiba, sus raíces y su historia (1810–1940)* (La Ceiba: Tipografía Renacimiento).
- Chambers, Glenn Anthony. 2010. *Race, Nation, and West Indian Immigration to Honduras, 1890–1940* (Baton Rouge: Louisiana State University Press).
- Chávez Borjas, Manuel. 1990. *Identidad, cultura y nación en Honduras* (Tegucigalpa: Ediciones Librería Paradiso).
- Craft, Linda. 1998. "Ethnicity, Oral Tradition, and the Processed Word: Construction of a National Identity in Honduras," *Revista Hispánica Moderna*, 51 (1), pp. 136–146.
- Cruz, Ramón E. 1953. *Panorama de las culturas históricas, su génesis, desarrollo, decadencia y desintegración* (Tegucigalpa: La Democracia).
- Cruz Sandoval, Fernando. 1984. "Los indios de Honduras y la situación de sus recursos," *América indígena*, 44 (3), pp. 423–446.
- . 1988. "Oficio No. 012-SE, 24 de Febrero de 1988." (Tegucigalpa: Archivo Etnohistórico, Instituto Hondureño de Antropología e Historia).
- Davidson, William. 1979. *Historical Geography of the Bay Islands, Honduras: Anglo-Hispanic Conflict in the Western Caribbean* (Birmingham: Southern University Press).
- Dirección General de Estadística y Censos. 1932. *Resumen del censo general de población levantado el 29 de junio de 1930* (Tegucigalpa: Tipografía Nacional).
- . 1941. *Resumen del censo general de población levantado el 30 de junio de 1940* (Tegucigalpa: Tipografía Nacional).
- . 1947. *Resumen del censo general de población levantado el 24 de junio de 1945* (Tegucigalpa: Tipografía Nacional).
- Echeverri Gent, Elisavinda. 1992. "Forgotten Workers: British West Indians and the Early Days of the Banana Industry in Costa Rica and Honduras," *Journal of Latin American Studies*, 24 (2), pp. 275–308.
- Editorial Santillana. 2009. *Ciencias Sociales 7* (Honduras: Editorial Santillana).
- Euraque, Darío. 1998. "The Banana Enclave, Nationalism and Mestizaje in Honduras, 1910's–1930's," in Aviva Chomsky and Aldo Lauria-Santiago (eds.), *Identity and Struggle at the Margins of the Nation-State: The Laboring People of Central America and the Hispanic Caribbean* (Durham: Duke University Press), pp. 151–168.
- . 2004. *Conversaciones históricas con el mestizaje y su identidad nacional en Honduras* (San Pedro Sula: Centro Editorial).

- Faúndez, Alejandra y Marcos Valdés. 2011. *Caracterización de la población indígena y afrodescendiente de Honduras* (Tegucigalpa: INE).
- Fiehrer, Thomas. 1979. "Slaves and Freedmen in Colonial Central America: Rediscovering a Forgotten Black Past," *The Journal of Negro History*, 64 (1), pp. 39–57.
- Ghidinelli, Azzo. 1984. "Los grupos humanos que se originaron después de la Conquista en la Costa Atlántica de Guatemala y Honduras," en *Memoria del Seminario de la Costa Atlántica de Centroamérica* (San José C.R.: CSUCA).
- Gómez, Ignacio. 1909. "Islas de la Bahía de Honduras," *Revista del Archivo y Biblioteca Nacionales de Honduras*, 5 (9–10), pp. 287–305.
- Graham, Ross. 2000. "The Bay Islands English: Stages in the Evolution of a Cultural Identity," in Oliver Marshall (ed.), *English-speaking Communities in Latin America* (Basingstoke: Macmillan Press), pp. 287–313.
- Instituto Nacional de Estadística (INE). 2001. *Características generales de los garífunas conforme a los resultados del XVI censo de población y V de vivienda, año 2001* (Tegucigalpa: INE).
- Instituto Hondureño de Turismo (IHT). s.f. *Boletín de Estadísticas de Turismo 2011–2015* (Tegucigalpa: IHT).
- Jones, David and Carlyle Glean. 1971. "The English-speaking Communities of Honduras and Nicaragua," *Caribbean Quarterly*, 17 (2), pp. 50–61.
- Kerns, Virginia. 1991. Book Review. "(Gonzalez) Sojourners of the Caribbean: Ethnogenesis and Ethnohistory of the Garifuna," *Anthropological Quarterly*, 64 (4), p. 209.
- Lang, Julio. 1951. "Espectro racial de Honduras," *América Indígena*, 11 (3), pp. 209–217.
- Langley, Lester D. and Thomas Schoonover. 1995. *Banana Men: American Mercenaries and Entrepreneurs in Central America, 1880–1930* (Lexington: University Press of Kentucky).
- Leiva Vivas, Rafael. 1993. "El indigenismo en la literatura hondureña," *Paraninfo*, 2 (4), pp. 139–152.
- León Gómez, Alfredo. 1988. *Perfiles de Honduras (1973–1979)* (Comayagüela: Imprenta Soto).
- Lunardi, Federico. 1946. *Honduras maya* (San Pedro Sula: Compañía Editora de Honduras).
- Martin, Robert Montgomery. 1836. *History of the West Indies: Comprising Jamaica, Honduras, Trinidad, Tobago, Grenada, the Bahamas and the Virgin Isles* (London: Whittaker & Co.).

- Martínez Peláez, Severo. 1979. *Patria del criollo: ensayo de interpretación de la realidad colonial guatemalteca* (Guatemala: Editorial Universitaria).
- Mejía, Medardo. 1989. *Historia de Honduras* (Tegucigalpa: Editorial Universitaria).
- Mörner, Magnus. 1970. "Historical Research on Race Relations in Latin America during the National Period," in Magnus Mörner (ed.), *Race and Class in Latin America* (New York: Columbia University Press), pp. 199–230.
- Pastor Fasquelle, Rodolfo. 2008. "La raíz del racismo ayer y hoy," *Yaxkin*, 24(1), pp. 145–147.
- Payne Iglesias, Elizet. 2007. *El puerto de Truxillo: un viaje hacia su melancólico abandono* (Tegucigalpa: Editorial Guaymuras).
- Posas, Mario. 1981. "El problema negro: racismo y explotación en las bananeras," *Alcaraván*, (9), pp. 6–9.
- Secretaría de Planificación, Coordinación y Presupuesto (SECPLAN). 1987. Memoria del primer seminario-taller con los grupos étnicos autóctonos de Honduras celebrado en Comayagua, el 23 y 24 de julio de 1987.
- SECTIN. 1976. "Minorías étnicas," *Sectante*, 1(4), pp. 28–31.
- Soluri, John. 2003. "Banana Cultures: Linking the Production and Consumption of Export Bananas, 1800–1980," in Steve Striffler and Mark Moberg (eds.), *Banana Wars: Power, Production, and History in the Americas* (Durham: Duke University Press), pp. 48–79.
- Stutzman, Ronald. 1981. "El Mestizaje: An All-Inclusive Ideology of Exclusion," in Norman E. Whitten, Jr. (ed.), *Cultural Transformations and Ethnicity in Modern Ecuador* (Urbana: University of Illinois Press), pp. 45–94.
- Suazo, Salvador. s.f. "De Saint Vincent a Roatán: un resumen etnohistórico garífuna = [Yurúmaingien dagá Rubadan: Murusun lidangien lúragate garífuna yurúmaina labürühan]." (Tegucigalpa: CEDEC; Netherlands: Samenwerking Vastenactie).
- Tomczyk, Thomas. 2007. "Educating the Island Nation," *Bay Islands Voice*, August 1st, 2007.
- Tosco, Manuel y Rubén Mondragón en colaboración con Rogelio Martínez A. 1958. *Aspectos demográficos y económico-sociales de la población de Honduras* (Tegucigalpa: Banco Central de Honduras).
- UNICEF. 2012. *Niñez indígena y afrohondureña en la República de Honduras* (Tegucigalpa: UNICEF Honduras).
- Vallejo, Antonio. 1997. *Primer anuario estadístico correspondiente al año de 1889* (Tegucigalpa: Editorial Universitaria).

Velásquez, Melida. 2001. “El comercio de esclavos en la Alcaldía Mayor de Tegucigalpa, siglos XVI al XVIII,” *Mesoamérica*, (42), pp. 199–222.

新聞：出版地 Honduras

Cronista

Nuevo Tiempo

Prensa

Tiempo

Tribuna

新聞：出版地 Jamaica

Gleaner

政府刊行物

Gaceta, Honduras

United States National Archives, U.S. Department of State, Record Group 33.

〈Resumen〉

El mestizaje y los negros hondureños: desde la perspectiva de los negros ingleses

Naoya KANAZAWA

A través del estudio de los negros ingleses en la costa norte de Honduras, este artículo examina el papel del mestizaje en configuraciones sociales. En especial se enfoca en la comparación de los contextos sociales de los negros ingleses y los garífunas en el proceso de la construcción de la nación.

Este escrito está compuesto de tres partes. En primer lugar, muestra la historia de distintos negros en la época colonial. Esta parte enfatiza que, a pesar del énfasis que tienen los garífunas en los medios de comunicación, diversos negros arribaron a la costa norte de Honduras durante la época colonial.

La segunda parte analiza la historia de los negros ingleses en el Caribe. Ellos son descendientes de inmigrantes que llegaron a Honduras para trabajar en la zona bananera de la costa norte durante los años de la formación del Estado al principio del siglo XX. La llegada de estos trabajadores fue ampliamente criticada por ciertos sectores del país, los cuales consideraban que su presencia era nociva a los intereses sociales de los hondureños.

La última parte explora la discriminación racial contra los negros en Honduras. El mestizaje ha sido entendido en este país como una ideología que genera inclusión social. Sin embargo, también ha generado procesos de exclusión hacia ciertas comunidades. Este ha sido el caso de los negros ingleses, los cuales no han sido incluidos en la idea de mestizaje que se ha consol-

idado en Honduras. La nacionalidad de Honduras ha sido descrita a partir de la unión entre las comunidades indígenas, grupos europeos y los garífunas. Pero, debido a su polémica llegada a comienzos del siglo XX y al rechazo que sufrieron desde este momento, los negros ingleses no han sido considerados como parte integrante de la nación.

De esta manera, el artículo concluye mostrando que la idea del mestizaje ha incluido y excluido a diversos negros en Honduras. La ideología del mestizaje ha ayudado a que los garífunas hayan sido incorporados en las narrativas de la nación. Sin embargo, diversos negros que llegaron en la época de la colonia y los negros ingleses han sido marginados de este proceso. Hoy en día, los negros ingleses siguen siendo considerados como foranéos y no han sido incluidos en la historia de la sociedad hondureña.